

男里遺跡発掘調査概要・VII

-府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区(双子上池)に伴う-

2003年3月

大阪府教育委員会

はしがき

泉州は全国的にみても溜池の多い地域であり、溜池は当地域の景観を形成する要素のひとつであります。男里遺跡の所在する泉南市域にも、約90箇所の溜池が存在します。

平成7年度より行われている双子池堤体改修に伴う一連の発掘調査では、弥生時代から奈良時代の遺構や遺物が確認されており、当時の歴史を復元する上で、欠くことのできない成果を得ています。市域の景観を構成する要素である溜池が形成された時期については、意外に判明していません。双子池の場合、既存の資料では築造の記述は文献資料にみられます、年代の記述にとどまるものです。

今回の発掘調査では、双子上池の堤体構築に関わる資料が得られました。堤体盛土の基礎の痕跡と考えられる溝や、堤体構築前の耕作痕などです。これらの資料から、双子上池の構築年代や拡張の過程が立体的に復元できます。ここで調査成果をご紹介することにより、皆さんが日常生活眼にする景観を、より身近に感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたり泉南市教育委員会をはじめ関係諸機関ならびに地元の皆様の多大なるご協力を頂いたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政にお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区（双子上池）に伴う、泉南市男里所在男里遺跡における発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が行った。
3. 調査は、文化財保護課主査藤澤真依を担当者とし、泉南市教育委員会生涯学習課の協力を得て平成14年10月から平成15年3月まで行った。発掘調査および遺物整理に際し、泉南市教育委員会生涯学習課河田泰之氏の全面的な協力を得た。
4. 調査に要した費用は、農林水産省と文部科学省の補助金を得、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。
5. 本書で使用した座標は国土座標第VI系、方位は座標北、標高はT.P.(東京湾平均海面)である。
6. 航空写真測量は、株式会社シビルコンサルタンクトに委託し、撮影フィルムは同社において保管している。
7. 遺物の写真撮影は(有)阿南写真工房に委託した。

8. 本書の執筆・編集は河田氏が行った。
9. この概要是300部作成し、一部あたりの単価は746円である。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の環境	2
第3章 調査成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構と遺物	6
第4章まとめ	15
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 調査区の位置と区割り	1
第3図 市内の地形分類と主要な遺跡・溜池	3
第4図 I・II層出土土器	5
第5図 調査区平・断面図	7・8
第6図 流路1出土土器	9
第7図 流路1・SD01平・断面図	10
第8図 SX01平・断面図	13
第9図 SX01出土土器	14
第10図 山堤体の規模	15
第11図 双子上池の変遷	16

表目次

第1表 蔽流遺構と文献にみられる溜池・井堰	2
-----------------------------	---

図版目次

図版1 調査区断面
図版2 流路1
図版3 SD01~03・SX01
図版4 出土遺物 1
図版5 出土遺物 2

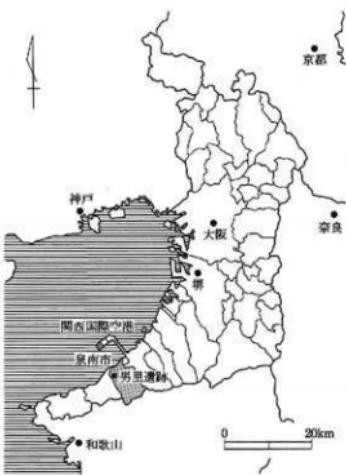
第1章 はじめに(第1・2図)

本調査は、双子上池における堤体改修工事に伴うものである。双子上・下池における堤体改修に伴う発掘調査は、平成7年度より過去6度行われており、今回の調査は、双子上池東側堤体において発掘調査が必要と判断された範囲のうち、南端から北へ80mの区間、400m²を対象としたものである。

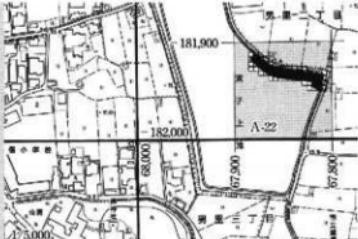
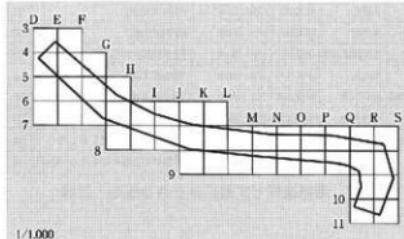
調査では、調査区にグリットを設定し、遺物の取り上げなどを行った。過去の調査と同じく、国土標準第VI系に基づく5m四方のグリットが最小単位となる。設定方法は次の通りである。大阪府都市計画図1/2500地形図をもとに、500m四方のグリットを12区画設定し、これにA～Lまでの番号を付す。この各区画に100m四方のグリットを25区画設定し、1～25までの番号を付す。さらに、100m四方グリットを400等分した5m四方グリットが最小単位となる。この100m四方のグリットを5m四方のグリットに区画する軸線のX軸にはA～T、Y軸には1～20の記号番号を付し、各グリットは北西角を交差するX・Y軸の名称で呼称する。

現地調査では、堤体盛土および池底に溜まったヘドロの大半をバックホーで除去し、これより下層は人力掘削を行った。また、調査の迅速化、省力化をはかるため、航空写真測量による平面図化作業を行い、1/20の平面図を作成した。水準はT.P.（東京湾平均海面）を使用し、断面観察などにおける層位の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』（1992）に準じた。

調査は、文化財保護課主査藤澤真依が担当し、泉南市教育委員会生涯学習課河田泰之の協力を得た。紺原 隆氏には、SD01の解釈に有益な助言を頂いた。現地調査および本書の作成にあたっては、江尻美代子、蒲生徹幸、藏田弘幸、田上真理、富 愛、藤野 渉、真鍋紀美子らの援助を得た。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区の位置と区割り

第2章 遺跡の環境（第3図、第1表）

今回の調査では、双子上池築造前後に
おける土地利用の変遷と、双子上池の堤
体拡張の過程を想定できる資料を得
た。

泉南市内における灌漑に関する資料
には一定の蓄積があり、ここでは既往の
調査で確認された灌漑遺構と考えられる
ものと、文献に記載されている灌漑施設
について概観する。さらに、泉南市内に
おける灌漑体系の変遷をおおまかに辿る
ことで、今回の調査成果を評価するため
の基礎資料を提示する。

発掘調査で確認されている灌漑遺構、
文献資料で確認できる溜池や井堰に関する記述は、第1表の通りである。これらに加えて、関連する時期の集落跡が確認された遺跡と地形分類図を重ね合わせたものが、第3図である。以上の資料から、下記の点が指摘できる。

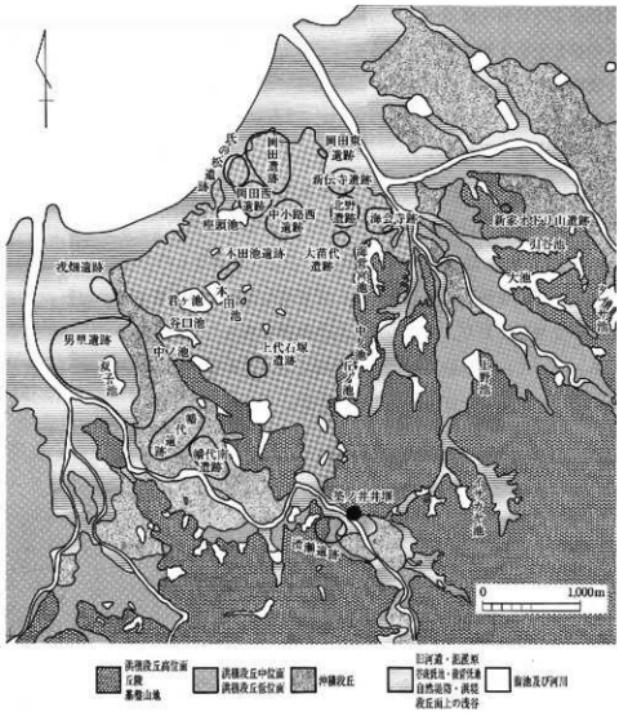
市内における灌漑体系は、河川灌漑、
井戸灌漑、溜池灌漑に区分できる。

灌漑遺構の分布する範囲は、7世紀代
以降には沖積地、11世紀には洪積段丘、
14世紀以降は丘陵・谷間へと分布範囲が
拡大し、現在に至ることが指摘できる。

上記の時期区分は、おおまかには灌漑
形態の変遷として捉えることができる。
7世紀以降14世紀までは河川灌漑で、
14世紀以降、特に17世紀以降には溜池
灌漑が主流を占める。ただ、備代南遺跡
では17世紀代においても井戸灌漑が一時
期みられる。泉南市内という限られた範

遺跡名	遺構	遺跡名	築造年代	施設年代	文献
男里	溝	SD03	7C	-	①
男里	溝	溝2	7C中	-	②
男里	しがらみ	流路1	7C後-8C	-	③
男里	溝	SD01	11-12C	13C	④
衣原	溝	大溝	11C	13C	⑤
衣原	溝	SD03	11C	13C	⑥
武雄	溝	SD03	11C	14C末	⑦
衣原	溝	SD03	11C	14C末	⑧
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD02	12C初	14C末	⑨
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD03	12C初	14C末	⑩
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD05	12C初	14C末	⑪
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD06	12C初	14C末	⑫
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD07	12C初	14C末	⑬
岡田西・氏の松	溝	第2調査区SD02	12C初	14C末	⑭
上代石塚	溝	SD03	12C	13C	⑮
中小野西	溝	SD01	中世(11-13C)	-	⑯
中小野西	溝	第2トレンチ	中世(11-13C)	-	⑰
木田池	溝	SD01	中世(11-13C)	-	⑱
房原	溝	SD02	中世(11-13C)	-	⑲
男里	溝	大溝	中世(11-13C)	-	⑳
大正代	溝	SD01-03	11-12C	-	㉑
大正代	溝	-	-	14C	㉒
椿代	井戸	井戸(4基検出)	-	13-14C前半	㉓
岡田西・氏の松	井戸	第2調査区SE01	14C末-15C初	-	㉔
岡田西・氏の松	井戸	第1調査区SE01	14C末-15C初	-	㉕
岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD01	14C末-15C初	-	㉖
椿代南	井戸	井戸	17C後半-18C	-	㉗
岡田	井戸	SD01	-	-	㉘
現在の名称	記載の名称	年代	西暦	内容	出典
人池	庄平太池	延喜3年	1300	築造	「日輪山庄明寺代々記」
不明	盆地引水池	宝徳3年	1451	築造	「日輪山唐明寺代々記」
夏子ノ池	及上ノ池	寛長18年	1613	築造	「東歐岡田水系の開拓」
夏子ノ池	反子下池	寛永3年	1626	築造	「寛政四年水脈の免書」
鳥の池	鳥の池	正保5年	1648	境界闘争	「日輪山唐明寺代々記」
イイカサ池	イイカサ池	寛文4年	1664	境界明示	「山田新五郎田地買得由縁書」
引引池	引引池	寛文4年	1664	地界明示	「山田新五郎田地買得由縁書」
丘之池	丘之池	寛政11年	1671	音韻調査	「新字新義」
只ヶ池	者ヶ池	宝永3年	1706	修理	「鶴田家文書」
谷口池	谷口池	宝永3年	1706	修理	「鶴田家文書」
木田池	木田池	宝永6年	1709	修理	「鶴田家文書」
小野	瓦之池	享保3年	1718	池作	「鶴田家文書」
上野池?	上野伊佐派池	享保6年	1721	記述	「日輪山唐明寺代々記」
中ノ池	中ノ池	享保15年	1730	修理	「鶴田家文書」
篠ノ井井池	篠ノ井の池	享保16年	1731	修理	「鶴田家文書」
海老井池	海老井池	享保19年	1734	所在明記	「五郷内志・泉州志」第二卷
タブサ池	太峰佐池	享保19年	1734	所在明記	「五郷内志・泉州志」第二卷
鹿原池	鹿原池	文政7年	1824	所在明記	「鶴田村灌漑様に付属方より欲書」

第1表 灌漑遺構と文献にみられる溜池・井堰



第3図 市内の地形分類と主要な遺跡・溜池

7世紀以降では男里遺跡^①・戎畑遺跡^②・幡代遺跡^③・北野遺跡^④・新伝寺遺跡^⑤があげられる。14世紀以降の集落は発掘調査では岡田遺跡などで確認されているものの、現時点では前代に比して確認している集落域は少ない。なお、絵図・文献を参考にすると、17世紀代には、現在みられる各集落が形成されていたことがわかる。これまで行われた発掘調査では、近世以降の集落は現在の市内各集落域外の耕作地などでは確認されていないことから、文献などにみられる近世以降の集落は、現存する集落と位置的には重複する可能性が高い。

上記の集落の増加と灌漑体系の変遷から以下の点が指摘できる。

集落の増加と耕地の拡大は比例する。11世紀代以後、洪積段丘上に灌漑水路網が設置され耕地拡大が想定できるが、中世以降は前述のとおり集落も増加する。

灌漑体系の変遷は単純ではない。灌漑体系の移行に際し、前代より大量の用水をより安定して得ることを目的とするのなら、河川灌漑から溜池灌漑へと単純に移行するべきである。しかし、

図においても灌漑体系の変遷は單一的ではないことがわかる。

文献には、江戸時代に行われた溜池の補修の様子が記されている。費用がかかる場合には藩費による「御入用普請」を申請する場合もあったようである。

上記の灌漑遺構と重複する時期の集落跡は、次の通りである。

7世紀以降では男里遺跡^⑥・一般的なものではないが海会寺跡の寺院東側の集落があげられる。11世紀以

実際には岡田西遺跡周辺のように河川灌漑→井戸灌漑→溜池灌漑へと変化する。つまり、上記の目的に反した灌漑体系の移行を示す場合もみられるからである。このことから、灌漑体系の変遷は、各集落の内在的な要因によるものだけではなく、当該時期の社会的な要因にも強く影響を受けていることが想定できる。

なお、7世紀以前の灌漑体系は、既知の資料では把握できない。市内では繩文時代晚期以降7世紀代までの集落が以下の遺跡で確認されている。男里遺跡^①・氏の松遺跡^②・新家オドリ山遺跡^③・滑瀬遺跡^④・岡田東遺跡^⑤である。いずれも地形分類でいう沖積地にあたるかそれに隣接する箇所に立地し、集落も同時期における他地域の集落と比較すると大規模なものではない。つまり、集落の立地は容易に耕地化が可能な沖積地近辺であり、大規模な灌漑施設を構築せずとも用水の確保が可能な箇所に集落が立地しており、集落の規模が小規模であることから耕地拡大の必要性は低いものと想定できる。よって、7世紀以前は沖積地内における非体系的な灌漑体系（後世と比べると小規模で簡易な施設）であった可能性が想定できる。

註

- ① 泉南市教育委員会1993「男里遺跡02-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』
- ② 大阪府教育委員会1997「男里遺跡発掘調査概要」Ⅱ
- ③ 泉南市教育委員会1999「戎畠遺跡97-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X VI』
- ④ 泉南市教育委員会1996「戎畠遺跡発掘調査現況説明会資料』
- 泉南市教育委員会1998「戎畠遺跡概往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X V』
- 泉南市教育委員会1998「戎畠遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X V』
- 泉南市教育委員会1998「戎畠遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X V』
- 泉南市教育委員会1998「戎畠遺跡97-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X V』
- 泉南市教育委員会1995「岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書」
- 泉南市教育委員会2001「上代石塚遺跡発掘調査報告書」
- 泉南市教育委員会1994「中小川西遺跡93-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X I』
- 泉南市教育委員会1995「中小川西遺跡93-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X II』
- 泉南市教育委員会1995「本町遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X II』
- 泉南市教育委員会1995「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No1』
- 泉南市教育委員会2002「共潤伝建設に伴う大正代遺跡発掘調査報告書」
- 泉南市教育委員会1996「大岱遺跡」『泉南市文化財年報No2』
- 田中一慶1993「縄代南遺跡・縄代遺跡の調査」『歴研選題』第8号泉南市歴史研究会
桥本 哲1994「縄代遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会第30回資料』財大阪文化財センター
- 田中一慶1993「縄代南遺跡・縄代遺跡の調査」『歴研選題』第8号泉南市歴史研究会
田中一慶1994「縄代南遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会第30回資料』財大阪文化財センター
- 泉南市教育委員会1995「岡田遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X II』
- 泉南市史編纂委員会1983「泉南市史」史料編
- 谷 美光1982「寛政四年水害の災害」「おのさと」第2集
- 西田七之助1955「第三編徳川時代と幕末」『博井草史』
- 並河誠所1971「江戸内志・泉州志」第二巻熊山勝出版
- 豊田栄典氏による地形分類にもとづく。第3図が同氏による地形分類図を一部改変したもの。「地理的環境」「海会寺」泉南市教育委員会1997 参照。
- 大阪府教育委員会2002「既往の調査」「男里遺跡発掘調査概要」VI 参照。
- 泉南市教育委員会1987「海会寺」
- 泉南市教育委員会1995「海会寺・T」『泉南市文化財年報No1』
- ④と同じ。
- ⑤と同じ。
- 橋本 哲1994「縄代遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(財)大阪文化財センター
- 泉南市教育委員会1995「北野遺跡」『泉南市文化財年報No1』
- 泉南市教育委員会1995「新長寺遺跡」『泉南市文化財年報No1』
- 泉南市教育委員会1998「97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X V』
- 泉南市史編纂委員会1983「近臣編」『泉南市史』史料編
- ⑥と同じ。
- 泉南市教育委員会1996「岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書」
- 堀田啓一1987「原始古代の泉南」『泉南市史』史編纂 堀田啓一
〔財〕大阪府埋蔵文化財協会1988「香瀬遺跡」
- 石橋広和1995「弥生時代終末期における和泉南部地域の集落遺跡の変化」『古代』99号早稲田大学考古学会

第3章 調査成果

第1節 基本層序（第4・5図、図版1）

層序は、次の通りに大別できる。堤体盛土及び池底のヘドロ、旧耕作土、流路、地山（河床）である。以下、上記の区分をもとに層序の概要を記す。

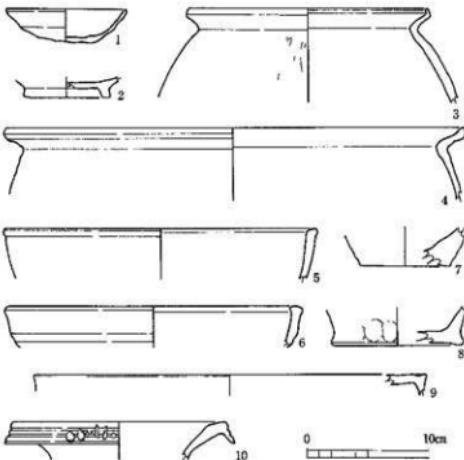
I層（第5図・1～4層） 堤体盛土及び池底のヘドロである。調査区全面においてみられる。なお、堤体盛土には土層の上下関係により3単位に区分できる。ひとつが調査区北壁断面のJライン付近でみられる堤体盛土の切り合い関係（図版1）で2単位の盛土に区分できる。さらにひとつが調査区北端（第5図A-B間断面）で見られる2単位の溜池に伴う池底のヘドロ層の存在である。現在の堤体盛土に対応する池底のヘドロ層は2層で、3～5層は同様に池底のヘドロ層であるが、現在の堤体盛土（2層）直下にみられることから、後者は旧堤体に伴うものと考えられる。いずれも部分的なもので、堤体改修が部分的に行われていたことを示す。

II層（第5図・12～15、①層） 黄灰色系のシルトで、堤体構築前の旧耕作土である。堤体構築のための盛土（I層）に伴い削平されており、H-J間およびN-S間でしか遺存していなかった。また、池内の用水による浸食作用により、上記の範囲内においても堤体寄りの2mほどの範囲でしか遺存していない。

II層からは、次の遺物が出土しているほか、土師質土器の細片が少量出土した。1は皿である。底部外面に指痕が残り、口縁端部はヨコナデを施す。胎土は非常に精良で、色調は白色。焼成不良の瓦器の可能性も考えられる。口径10cm、器高2.4cm。2は黒色土器A類である。摩耗が激しく調整は不明。底径7.2cm。14層上面で耕作痕（SD02・03）を検出した。

III層（第5図7～37層） 地山面を河床とした場合、II層直下までの層位はすべて流路埋土といえる。出土遺物と層位関係から、流路には2時期（流路1・2）みられることがわかる。

流路1は、平面的にはGライン以西でみられ、南東から北西に流下する。埋土は7～11層、褐灰～黒褐色の細砂やシルトで疊が混じる。後述するとおり弥生時代後期および飛鳥～奈良時代の遺物が出土している。



第4図 I・II層出土土器

流路2は、平面的にはNライン以東でみられ、南東から北西に流下する。埋土は16~20層、褐色~黄褐色の細砂やシルトである。弥生時代中期の土器が出土している（第5図）。

出土した遺物は3・4は壺である。いずれも摩耗が激しく調整がわかりづらいが、3は体部外面にハケメが残る。5・6は壺もしくは高杯の口縁部である。いずれも摩耗が激しく調整がわかりづらい。7・8は壺もしくは壺の底部である。8は外面に指頭痕が残る。9は高杯の杯部である。10は壺の口縁部である。摩耗が激しい。垂下する口縁端部には3単位の凹線文、2個一単位の円形浮文がみられ、凹線に直交するキザミメ状の痕跡が残る。これらの遺物から流路2の埋没した時期は、IV様式頃と考えられる。

IV層（第5図38層） 地山である。明青灰色粘土混じり疊層で、調査区全体でみられる。平成7~13年度の調査でも確認している層位である。

第2節 遺構と遺物

1. 流路1（第5・6・7図、図版2・4・5）

Gライン以西でみられ、南東から北西に流下する流路である。今回の調査で確認した範囲では、埋土の大半が後世の影響を受けている。断面をみると、池底のヘドロが埋土の大半を占めることから溜池構築後に浸食作用を受け、さらに後述するSD01にも切られていることから、流路本来の埋土は半分程度しか遺存していないことがわかる。

なお、流路1のベース面を第5図33層としたが、あくまで仮定にすぎない。盛土の可能性も考えられる。33層を含めて、その直下の33・34層（第7図12・13層）はいずれも、褐色粗砂混じりの疊層であり、断面をみても凹凸が見られ自然堆積であるとは断定できないからである。第7図D-E間断面を見ると、SD01の掘削が肩部に及んでいることから、流路1のベース面が13・14層のいずれの層位であるのか、断面からは判断できなかった。このため、航空測量の時点では33層（第7図13層）上面を流路1のベース面と仮定し測量を行ったが、後述するとおりSD01が堤体盛土に伴う基礎であれば、33・34層は堤体盛土の可能性も想定できる。

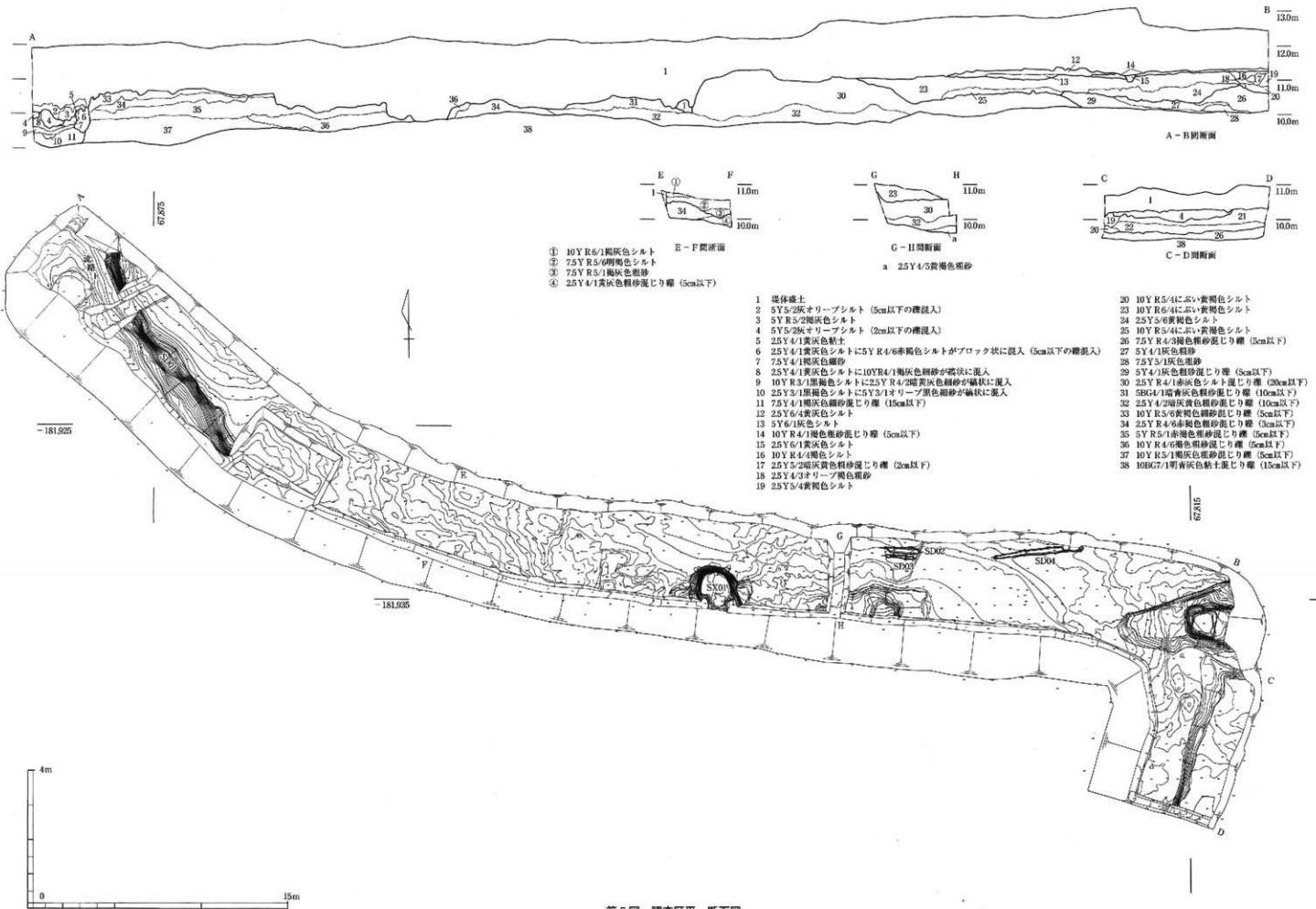
流路1の埋土は、出土遺物の年代から上層と下層に大別できる。下層（第5図11層）からは弥生時代後期の遺物が出土しており、上層（第5図7~10層）からは飛鳥・奈良時代の遺物が出土している。下層は細砂混じり疊で、上層は細砂~シルトで構成されラミナがみられる層位もある。

11~27は下層出土の遺物である。

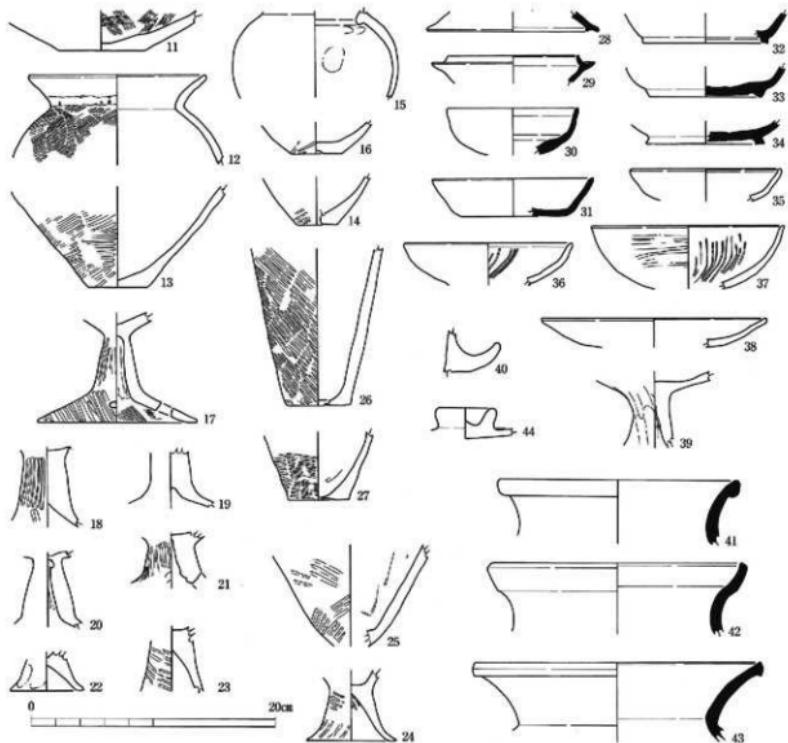
11は壺もしくは鉢底部である。器壁外面はヘラケズリ、内面には原体幅1cm程度のハケメが残る。底径6.8cm。IV様式か。

12~14は壺である。12は口縁部である。体部内面はナデ、口縁部には接合痕が残る。口径14.8cm。13は底部である。体部内面はナデがみられる。底径4.8cm。14は底部である。内面は摩耗が激しく調整は不明。

底径3.6cm。15~16は壺である。15は体部である。頸部との接合痕が明瞭。摩耗が激しく調整



第5図 調査区平・断面図



第6図 流路1出土土器

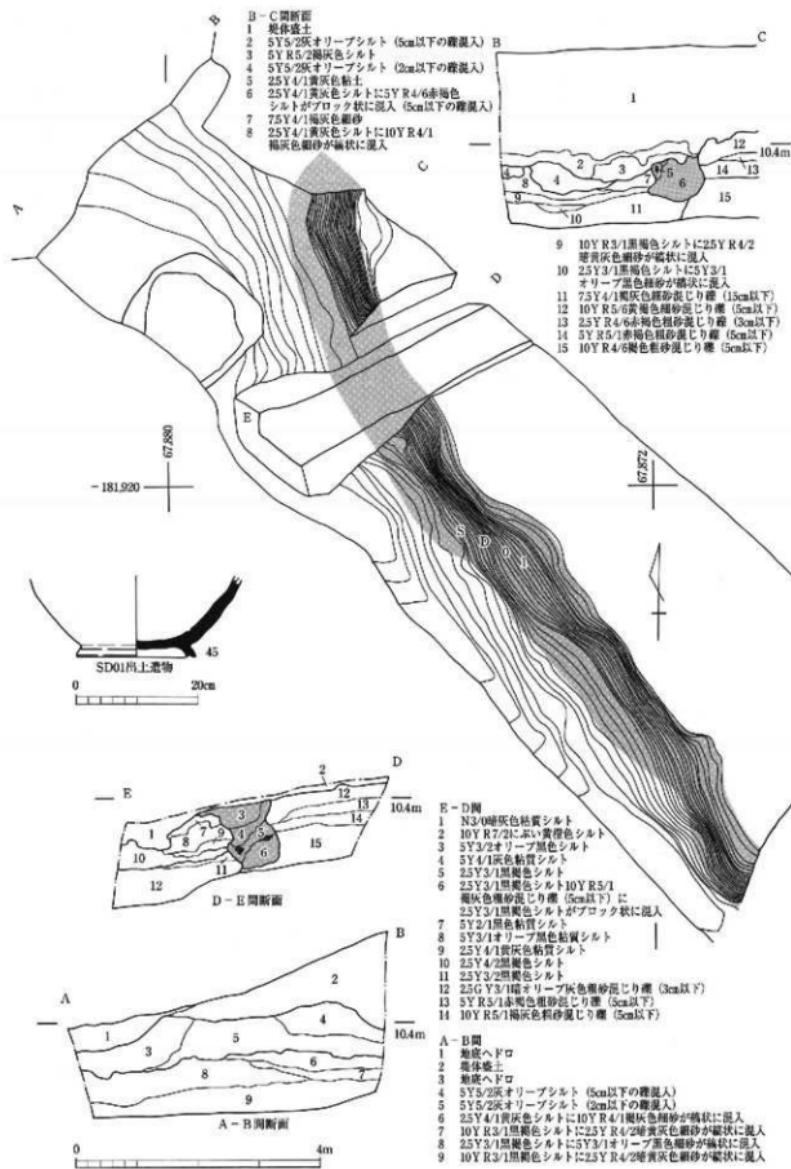
がわかりづらいが、内面に指頭痕が残る。体部最大径13.6cm。16は底部である。内面はナデ、外面にはヘラミガキが一部に残る。底部径4cm。

17~21は高坏である。脚柱部が中空のもの（17・20・21）と、中実のもの（18・19）がみられる。いずれも外面はヘラミガキ、脚部内面は中空のものは未調整。脚裾内面にはハケメが残るものもある（17）。17・21はスカシ穴がみられる。17は脚裾径13.2cm。

22~25は製塩土器である。22~24は脚部である。外面は、ユビオサエ（22）のものとタタキ（23・24）のものがある。24は脚裾と脚柱部付近でタタキの方向が異なる。25は体部である。外面はタタキ、内面には一部に板状工具の痕跡がみられる。

26~27はマダコ壺である。体部外面はタタキ、内面はナデで一部に板状工具によるナデがみられる。底部に焼成前の穿孔がみられ、木葉痕が残る。

流路1下層の出土遺物は、11がIV様式、その他はV様式後半。おおむねV様式後半に埋没し



第7図 流路1、SD01平・断面図

た流路の埋土と考えられる。

28~42は上層出土の遺物である。

28~34は須恵器杯である。28は蓋である。口径14cm。29は受部をもつもので、口径10.4cm。焼成が甘く内面は赤褐色を呈する。30は口径10.8cm。31は口径13.2cm、器高3.2cm。32~34は高台のつくものである。32は底径10.4cm。33は底径9.2cm。34は底径10cm。

35~37は土師器杯である。35は内外面ともヨコナデがみられ、口径12.4cm。36は内面にはヨコナデののち放射状暗文を施す。口径14cm。37は内外面ともヨコナデののち、外面は横方向、内面は放射状暗文を施す。底部付近には横方向のヘラケズリがみられる。

38~39は高杯である。38は杯部である。内面にはヨコナデのちらせん状の暗文を施す。口径18.8cm。39は脚柱部である。外面は縱方向のユビオサエ、内面は中空で未調整である。

40は鍋もしくは壺の把手である。ユビオサエの痕跡が残る。

41~43は須恵器壺である。口縁端部を折り返すもの(41)、段をもつもの(42)、外反し面をもつもの(43)がみられる。41は口径20cm。42は口径20.8cm。43は口径23.6cm。

44は土師質土器である。蓋状の把手部分である。

上層の出土遺物は、時期差がみられる。須恵器杯(29)や土師器杯(36・37)は7世紀後半。須恵器杯(31~34)などは、8世紀初頭。8世紀初頭に埋没した流路の埋土と考えられる。

2. SD01 (第7図、図版2・3・4)

幅約1.2m、深さ0.5mで、遺構南端は断面をみると、流路肩と埋土の境界付近に掘削された溝であることがわかる(第7図D-E間断面)。このSD01の掘削による流路1肩の改変は平面的にも見てとれる(第7図)。調査時に検出した流路1のうち、コンターラインのつまつた不自然な箇所がみられる。これが流路1埋没後、SD01の掘削により流路1本米の肩が掘り込まれた箇所と考えられる。埋土は、土質をもとに区分すると、シルトとシルト混じり疊層にわけられる。このうち、シルト質の埋土の最下層(第7図E-D間断面5層)には、SD01に平行して径20cm程度の2本の木が並列し設置された状態が確認できた(図版3)。樹皮のついたものや、根の部分などがあり、材木のように成形されたものではない。

出土遺物は須恵器壺(45)のみであった。これはSD01の年代を示すものではないと考えられる。土層断面をみるとSD01は、現在の堤体盛土とそれに伴う池底のヘドロ層の直下をベースとして掘削されている。このベース面を構成する層位のうち流路1埋土の最上層(第7図E-D間断面7~9層)は、その直下の層位(10層)と比較すると、ほとんど遺物が出土していないと言ってよい。このことからSD01は、流路1上層から出土した土器が示す年代から一定期間経過(埋没)したのちに掘削されたことが想定できる。さらに、SD01で検出した並列する木はいずれも風化が進んでおり、切断するには鋸が必要なほどであった。このことから、SD01は出土遺物が示す年代のものとは考えにくく、流路1より新しい年代のものと考えられる。

SD01はどのような目的で掘削された溝であろうか。土木工法に関する文献を概観したにすぎず、資料を整理した上で専門家の助言を得たわけではないが、以下の可能性が推測できる。

- ・「暗渠」

SD01は、掘削後に礫を敷きつめ、その上面に溝の長軸に平行して2本の木を設置し、シルト質の土で埋めている。明治時代における農業土木教育の教科書である「農業土木」には、9種類の「暗渠」の構造が紹介されている^①。同書図中の「8」がSD01と似た構造をもつ。

その構造は「丸太は生松を良とす其布置法は直径8寸前後のもの二本を渠底の左右に入れ中間五六寸をもって水路たらしめ其上に一尺五寸許に切りたる割り木若くは龜甲束を横置しさらに被覆物を載せて土を以て埋むるものとす」とある。

同書記載の「暗渠」とSD01の構造が類似する点は以下の通りである。

①丸太を2本溝に平行して並べる点。

②使用する丸太の直径が20cm（8寸）程度である点。

ただ、上記の暗渠の構造についての記述とSD01を比較すると、次の相違点が指摘できる。

①丸太の上に載せる蓋の役割をする「被覆物」が検出されていないこと。

②SD01には溝底に礫（第7図5層）がみられる点である。

- ・「ノリ止（基礎）」

河川改修における護岸工事の工法を紹介した「河川改修の実際」に下記の記述がみられ、SD01と類似した構造をもつ「ノリ止（基礎）」が紹介されている^②。

〔d〕ノリ止（基礎）　急流部、準急流部では河床は砂礫で構成されており、くいの打ち込み困難かまたは不可能に近いので、基礎はコンクリートまたははしご土台とする。基礎下端は根固の底面以下として、基礎の受ける外力の合力が根固に作用しない用にする（第6.7（1）（2）参照）。」とある。

「はしご土台」とは、牛木を組んではしご状にしたもので、同書の「図6.7護岸標準図」をみると、ノリ止端に「はしご土台」ノリ面に直交するかたちで設置し、その上に堤防を積み上げている。同図によると、「はしご」は、直径12cmの桟木に長さ4.5mの「土台木」を載せるもの。

その他の構造は記載されておらず詳細な比較はできないが、堤防構築に際してノリ止めの基礎として設置した場合、盛土基底部のレベルより若干さがった位置に「はしご土台」が設置されることになることが想定できる。同書にある通り「基礎下端は根固め底面以下」とする必要があることから、「はしご土台」を設置した痕跡は、発掘調査で堤体除去後に平面検出可能で、平面的には堤体内法のノリ止に平行する溝状になると考えられる。

SD01は、「はしご土台」を用いた「ノリ止（基礎）」と構造上は以下の点で類似する。

①底面は堤体盛土基底部のレベルよりさがった位置にある。

②はしご状ではないものの木が2本並列して設置されている。

ただ、ノリ止め（基礎）にしては不自然な点がみられる。

- ①支えるべきノリ面が断面では確認できること
 ②前掲図6.7では、勾配をもつノリ面を支える「はしご土台」はノリ面に直交した状態で図示されているが、SD01の「はしご土台」状のものはほぼ水平である。

③SD01で確認した並列する木は、「はしご土台」のように画一的な材木を使用していない。

上記のうち、SD01は堤体盛土に伴う「ノリ止（基礎）」である可能性が高い。「暗渠」構築の目的は、耕作地における排水不良の解消及び「明渠」に比べ「面積を費やすの不利」や「修理のために毎年少なからざる労費を要す」ことがない点にある。⁹近隣住民によると、調査区付近の耕作地は通称「ダルカンゴ（ざるかご）」。水もちが非常に悪いとされる。例え耕作地であっても「暗渠」設置する必要はない。以上、「暗渠」を構築する必然性がないことと、構造上の類似から、SD01は双子上池堤体の「はしご土台」状の構造をもつ「ノリ止（基礎）」である可能性が高いと想定できる。

次に上記の仮定をふまえ、SD01の実年代をみることとする。まず双子上池の築造年代は、『寛政四年水張の奥書』に1618年と記載されている。これがSD01の構築年代の上限である。下限は地形図から判断できる。「明治42年測図」で「昭和22年第3回修正測図」の昭和29年地理調査書発行1/25000地形図「樽井」は、双子上池の形状が判明する最も古い資料といえる。これを平成13年泉南市内1/2500地形図と重ね合わせる。すると、調査区付近の堤体は変化していないことがわかる（第11図左）。さらに、1947（昭和22）年9月に米軍が撮影した航空写真（図版扉）をみると、双子上池の形状は平成13年発行地形図のものと大きな変化はない。つまり、昭和29年発行の地形図に描かれている双子上池の形状は、すくなくとも昭和22年の修正測図以前のもので、明治42年測量時点のものである可能性が高い。

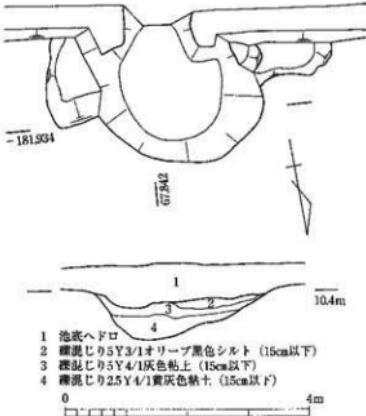
これらのことからSD01構築年代の下限は1909年になる。

以上、専門家の判断が必要ではあるがSD01は、双子上池堤体盛土に伴う「はしご土台」状の構造をもつ「ノリ止（基礎）」である可能性が高く、年代は1618年から1909年の間に限定できる。

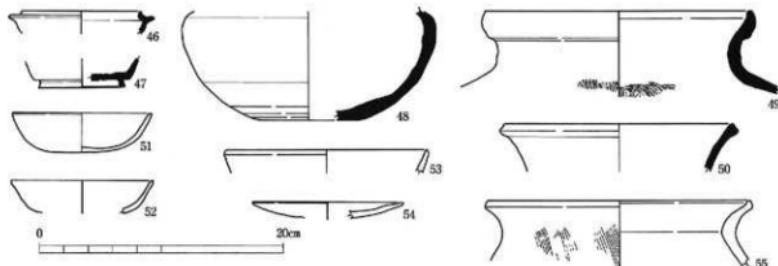
3. SD02・03（第5図、図版3）

耕作痕である。NラインからQラインの間の14層上面で検出した。幅20cm程度で、調査区に隣接する耕作地の地割りとほぼ同軸である（図版3）。埋土は黄灰色シルト。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

これらの以降の年代は、検出面である14層が



第8図 SX01平・断面図



第9図 SX01出土土器

基本層序Ⅱ層にあたることから、14世紀以降の耕作痕である可能性が想定できる。また、現在の双子上池堤体盛土の基底面で検出していることから、溜池の堤体構築前は一定期間耕作地として利用されていたことがわかる。

4. SX01 (第5・8・9図、図版3・4・5)

8L付近、池底のヘドロ直下で検出した。一部攪乱を受けている。直径約2.8mの楕円形で深さは約0.8mである。埋土は、灰～黒色のシルトもしくは粘土で織が混じる。

いずれの埋土にも不自然に疊層が混じる。検出面直上は堤体盛土及び池底のヘドロで、遺構年代の下限が現代にまで及ぶ可能性もある。SX01は後述するとおりSD01に伴う堤体の外側に位置する想定できる(第10図)。遺構底面のレベルは現在の池底とほぼ同じ。耕作痕と考えられるSD02・03が確認されていることから、双子上池築造以前には耕作地として利用されている。市内では中世以降の時期にSX01と同様の規模の灌漑用の井戸と考えられる土坑が散見されるようになる(第1表)。これらのことから、SX01は中世以降の灌漑用井戸で、8世紀初頭の遺物は双子上池築造若しくは堤体改修に伴い埋められた時混入した可能性も想定できる。

遺物の大半は最下層(第9図4層)から出土した。46～50は須恵器、51～55は土師器でいずれも最下層から出土した。46・47は杯である。46は口径9.6cm。47は口径7.2cm。48は壺底部である。体部最大径21.2cm。体部下半外面にヘラケズリがみられる。49・50は壺の口縁部である。49は口径22.4cm。50は口径18.8cm。51～53は杯である。摩耗が激しく調整は不明。51は口径11.6cm、器高3.2cm。52は口径12cm。53は口径16.8cm。54は高杯の杯部である。口径12.4cm。摩耗が激しく調整は不明。55は壺の口縁部である。口径22cm。内面調整は摩耗が激しく不明。

出土遺物の年代は、おおむね8世紀初頭と考えられる。

註

- ① 稲葉乙丙1897「第2章 排水」「農業土木」農業土木学会古典復刻委員会編1989「農業土木実用教科書」農業土木古典選集6巻 日本経済評論社
- ② 佐藤清一・西村 淳1972「6 溝岸、水制、束岡」「西川改修の実際」地人書簡
- ③ ①と同じ。

参考文献

- 田辺昭三1981「須恵器大成」
- 古代の土器研究会編1992「古代の土器1 郡城の土器集成」
- 中世土器研究会1995「概説 中世の土器・陶磁器」

第4章　まとめ

今回の調査では、次の遺構を確認した。弥生時代中期、弥生時代後期、奈良時代初頭の流路と、奈良時代初頭の遺物を含む不明土坑、おそらく14世紀代以降のものと考えられる耕作痕、あくまで推測ではあるが17世紀以降20世紀初頭までに限られる双子上池堤体に伴う「はしご土台」状の構造をもつ「ノリ止（基礎）」と推測されるSD01である。

上記の事柄から、調査区内における土地利用の変遷を次のように辿ることができる。なお、SD01は双子上池堤体盛土の「ノリ止（基礎）」と仮定して以下に論を進める。

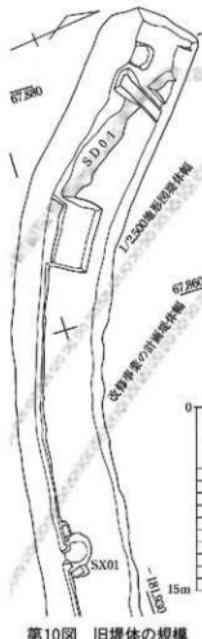
弥生時代中期には調査区南東部でみられた流路2が埋没し、弥生時代後期には流路1の埋没もはじまる。流路1は奈良時代初頭には完全に埋没する。調査区内は、奈良時代初頭までは自然流路が機能していたことがわかる。

これらの流路が完全に埋没し高燥化した時期は、流路の直上層にあたる調査区層序のII層の年代で把握できる。黒色土器A類および瓦器柄と考えられる土器が出土している。出土遺物の年代から、すくなくとも10世紀代、瓦器柄としての認識が正しければ14世紀代と考えられる。II層上面で耕作痕（SD02・03）を確認していることから、14世紀代以降には調査区内は流路は完全に埋没し、耕作地として利用されるようになったと想定できる。

II層上面が双子上池堤体盛土の基底部にあたることから、一定期間耕作地として利用された後に、溜池が築造されたことがわかる。双子上池の築造されたのは『寛政四年水張りの奥書』から1618年であることがわかる。この年代が、双子上池堤体の「ノリ止（基礎）」と考えられるSD01の構築年代の上限となる。下限は1909年である。現在の地形図と明治42年測量・昭和29年発行の地形図に記された双子上池の堤体に変化がみられないことと、1947（昭和22）年米軍撮影の航空写真と比較した結果による（第11図左、図版扉）。

SD01が「ノリ止（基礎）」であれば、双子上池における拡張の過程が、平面的に連れ、その時期もある一定の時間幅内で把握することができる。

まず、SD01を「ノリ止（基礎）」とした堤体の幅を復元する。平成13年発行1/2500地形図で調査区付近の堤体幅を確認すると約7.5m。また、双子上池堤体改修事業に伴う計画堤体幅を設計図面にて確認すると約15m。これらのラインを平面図で図示したのが第10図である。SD01を堤体内法のノリ幅として、そこから7.5mと15mの箇所にトンネルで示したラインがSD01に伴う堤体の外法ノリ幅となる。これを平成13年発行の1/2500地形図上に図示すると、双子上池が築造された



第10図 旧堤体の規模

1618年から1909年までの間に機能した双子上池の東側堤体が復元できる（第11図右）。

また、昭和29年発行の地形図と平成13年発行の地形図を重ね合わせると、双子上池の南西側の堤体形状が異なっていることが指摘できる（第11図左）。この部分は、昭和29年の地形図が発行されて以後、

現在に至るまでの間に双子上



第11図 双子上池の変遷

池の南西側が拡張されたことを示す。なお、1947年9月米軍撮影の航空写真（図版扉）をみると、双子上池の形状は現在のものと大きな変化はない。つまり、双子上池南西側の拡張は明治42（1909）年以降、1947年9月に行われた米軍による航空写真撮影以前におけるものといえる。

上記をまとめると、双子上池の築造以後、現在までの変遷を以下のようにまとめることができ（第11図右）。

1618～1909年 この間に双子上池東側が現在のものとほぼ同じかたちに拡張される。SD01はこの時期における旧堤体盛土の「ノリ止（基礎）」と考えられる。また、SD01は調査区北側では現在の堤体と交差し外側へ伸びるものと考えられる。この時期における双子上池東側の堤体は、現在のものより東側にひろがるものであった可能性が指摘できる。

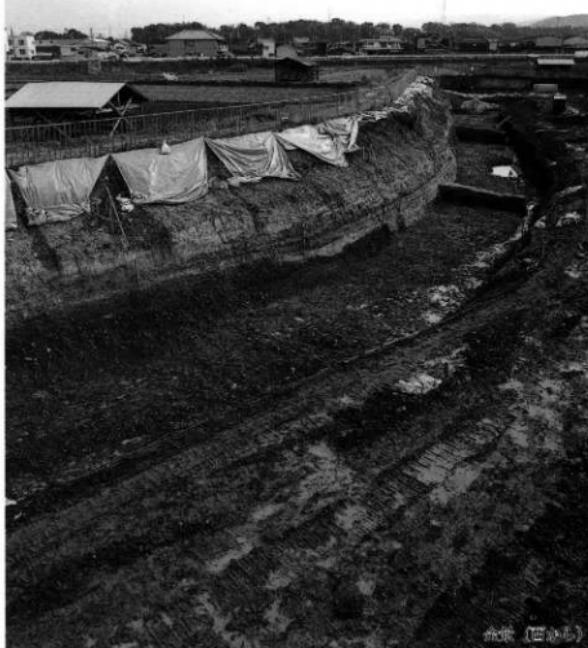
1909年～1947年 この間に双子上池南西側が拡張される。なお、昭和初期に双子上池東側の堤体の拡張を行なったと地元の方に伺った。その際、土器がたくさん出たとのことである。具体的にどの部分を拡張したのかまでは聞いていないが、恐らく調査区内の余水吐（流路2付近）の部分ではなかろうか。

以上、今回の調査成果、SD01の解釈については推測を前提として、双子上池の変遷を想定した。本来、上記の内容に言及するには、以下の手続きが必要と言える。まずSD01についての解釈は、専門家による検討を経て双子上池堤体に伴う「ノリ止（基礎）」であるかどうかの判断が必要であろう。また、地図上で把握できる大規模な拡張以外に、小規模な拡張も行なわれている可能性がある。溜池の堤体改修に関する詳細な事実関係の確認には、双子上池を管理する水利関係者からの聞き取り調査が有効と言えよう。

図版



1947.11撮影（上が北）



地盤 (Eから)



C-E



C-E



E-F (431) - G-H (31)



E-F





12



49



39



13



45



13



1



21



15



51



19



16



17



18



26



22

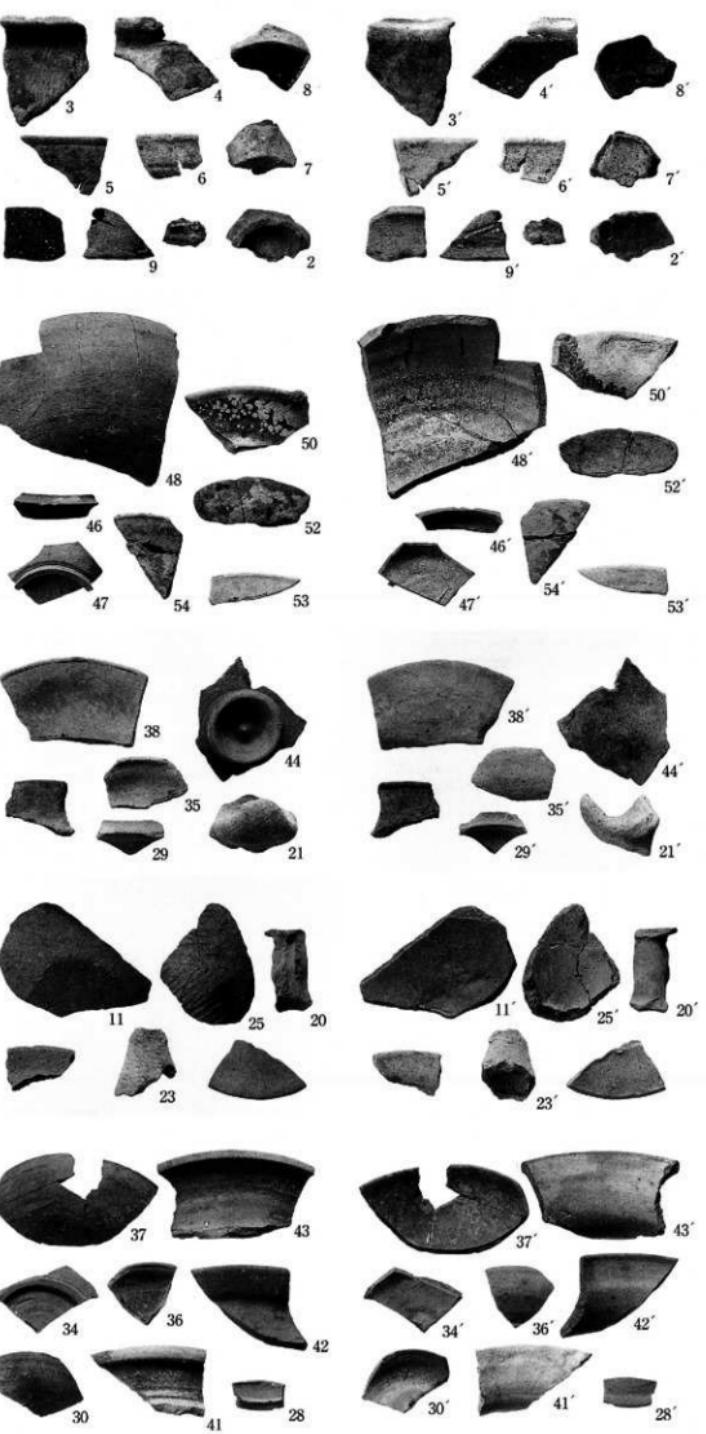


27



24





報告書抄録

ふりがな 書名	おのさといせきはつくつちょうさがいよう 男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ							
調査名	府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区(双子上池)に伴う							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	河田泰之							
発行機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06 (6941) 0351							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所轄遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡	北緯 東經	調査期間	測量面積 (m ²)	調査原因	
おのさといせき 男里遺跡	おのさかさんせんなんじ 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	12	34° 21' 30"	135° 15' 40"	2002年10月 ~ 2003年3月	400	堤体改修
所轄遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
男里遺跡	集落	弥生時代中期～後 期、飛鳥・奈良時代	流路	弥生土器・須恵器・土師 器	男里川の旧河道			
		近代以前	SD01		IIJ堤体に伴う基礎			
		中世以降	SD02-03		堤体構築前の耕作痕			
			SX01	須恵器・土師器				

男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ

-府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区(双子上池)に伴う-

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪府中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2003年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2-6-8

TEL 06-6976-8761

